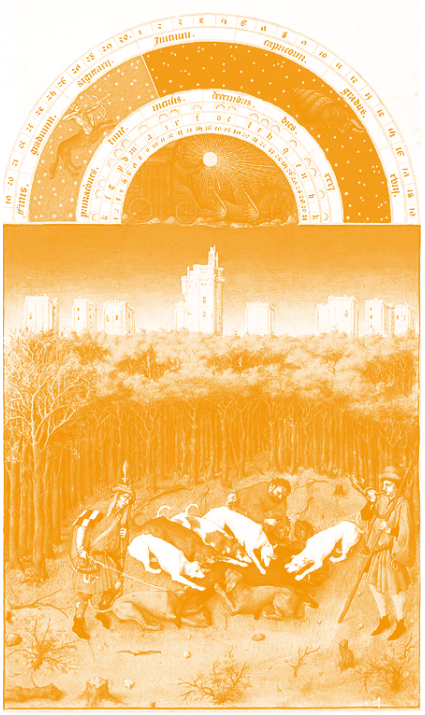
Keio Research Center for Liberal Arts

Newsletter 23

慶應義塾大学教養研究センターニューズレター第 23 号 /2013 年 11 月 30 日発行

Contents

巻頭言	新入生歓迎講演会――〈ことばの世界〉と〈物語の世界〉について――
特集Ⅰ	「情報の教養学」
特集Ⅱ	「学びの連携」、「日吉学」
特集Ⅲ	イメージをカタチにする 学生論文コンテスト／エディティング・スキルズ／学習相談／学期制
特集Ⅳ	未来先導基金プログラム「庄内セミナー」、「カドベヤ」
特集Ⅴ	研究サポート「研究の現場」から　徳永聡子／金山弘昌／有光道生／山口祐子
活動予定	11 月～ 2014 年 3 月、日吉キャンパス公開講座
私の○○自慢	



新入生歓迎講演会
――〈ことばの世界〉と〈物語の世界〉について――

日吉行事企画委員会（HAPP）委員長
小菅隼人（理工学部）
Hayato Kosuge

日吉行事企画委員会（HAPP）では、これまで多くの行事を企画実行してきました。舞踏公演、能公演、コンサート、スポーツ企画、環境週間、塾長と日吉の森の散策など、新入生・塾生が教職員や地域住民と一緒に参加するイベントは日吉キャンパスにおける恒例行事となり、それを毎年楽しみにしている方々も多くおられます。このように新しいアイディアをもって、授業とは異なる形の学びの機会を提供することは教養研究センターの出発点といっていいかもしれません。一方、このような企画を実施していく中で、「誰々の話をじっくり聴きたい」という声も多く寄せられます。そこで、今年度は新しい講演会シリーズを二つ立ち上げました。

一つは、〈ことばの世界〉のシリーズです。日吉キャンパスの新入生がまず学ぶべきことは、分野は違っても、「ことば」によって人間は精神活動を行い、お互いの関係を作っていくという事実です。この講演会では新入生に「ことば」の重要性と有効性をしっかり伝えるという主旨のもと、長く斯界の第一人者として発言し続けてきた本塾名誉教授、鈴木孝夫先生に講演をお願いしました（2013 年 4 月 17 日）。タイトルは、「新入生歓迎講演会〈ことばの世界〉: 武器としてのことば　日本の言語戦略を考える」です。鈴木先生は『ことばと文化』をはじめ、多数の著書をお持ちのたいへん著名な言語学者です。1926 年のお生まれですが、ユーモアを交えたマシンガントークは健在で、会場にあつまった学生やファンは、先生のお話しを堪能し、活発な質疑応答が行われました。

もう一つは、〈物語の世界〉のシリーズです。いわゆる実学の世界の他に、メルヘンやファンタジーの世界を知ることは、自分の視野を広げ感性を豊かにします。新入生たちが一生を通じて心の財宝となるような物語を持つことは、彼らの今後の人生にとって計り知れないメリットになると考えます。そのような豊かな物語の世界――メルヘンとファンタジーの世界――を新入生に提供することを目的として、アーサー王文学研究の第一人者であり、本塾大学名誉教授の高宮利行先生に講演をお願いしました（2013 年 6 月 6 日）。タイトルは、「新入生歓迎講演会〈物語の世界〉: 親を知らずに成長する主人公たち～アーサー王ロマンス・ファンタジーの本質」です。先生は動画を含めた多くの画像を使いながら、ハリーポッターなど現代のトピックスにも言及しつつ、新入生に自ら興味のあることを見つけることの重要さと面白さという明確なメッセージを下さいました。最後に先生ご自身による中世英語の朗読も会場を魅了しました。

二つの講演会では学生、教職員、地域住民が一緒になって講義を聴き、質疑応答が行われました。お二人の先生は、新入生に対して分かりやすい言葉で、しかし、長年の学識を惜しみなくつぎ込んだ講義をしてくださいました。日吉行事企画委員会は、知識・言語偏重型学習からの脱却、学生・教職員による一体型の活動、地域・社会への大学・キャンパスの開放を活動方針としていますが、その具体的な実施形態にはさまざまな形があり得ると思います。今後、この二つの講演会シリーズは、大学教育の原点に立ち返って、講義・質疑応答というオーソドックスな形に新しい内容を入れ込んで大事に育ててゆきたいと思っています。

『ベリー公のいとも豪華なる時禱書』（*Les Très Riches Heures du Duc de Berry*、15 世紀フランス写本）の「12 月の暦」。12 月の暦ながらノエルの祝祭ではなく、猪狩りの光景。7 匹の犬は猪を取り押さえ、2 匹はその巨体の下敷きとなり、それぞれの犬の形相に迫力がある。背景の城はベリー公誕生の城。

情報の教養学

「情報の教養学」について

新しい講演シリーズ「情報の教養学」を2013年度に開講しました。

現在、誰でも気軽にパソコンやスマートフォンを使って情報を発信できます。TwitterやFacebookがよく利用されていますが、これらは10年前存在していませんでした。また、個人レベルだけではなく、官公庁などの組織レベルからも、様々な情報が大量に公開されるようになってきました。2013年度春学期は、このような大量の情報がどのように利用され、またどのように利用されうるかを、ジャーナリズム、政治、データの可視化など様々な視点から第一線の講師に講演いただきました。

秋学期は、ユーザインタフェース、アプリケーション開発、ロボットなどの観点から、情報を支えている技術について講演いただいています。

（高田眞吾）

データが映す社会のゆらぎ

第1回、朝日新聞社の竹下氏は、ツイッターに書きこまれる大量の“つぶやき”から、人々の揺れ動く心理を可視化し、それを活用した新しい取材方法とその課題について言及しました。第2回、ジャーナリストの津田氏は、ソーシャルデータを活用して、ネットメディアとマスメディアの中間にある“民意”を読み取り、実際の政治にも反映できることを、実例を交えて解説しました。第3回、日本ジャーナリスト教育センターの赤倉氏は、新しい取材・報道の手段として注目される“データジャーナリズム”を体系的に解説し、データから導き出される“ファクト”にもとづいて世の中を歪みなく見ることが、的確な問題解決に重要であると指摘しました。続く第4回は、同センターの藤代氏・赤倉氏指導のもとワークショップ形式で行われ、データジャーナリズムの手法を、実践を通じて体験しました。第5回、国際大学GLOCOMの庄司氏は、オープンデータ（オープン・ガバメントデータ活用）について、豊富な事例を示しながら解説しました。これからの社会では民間の団体や個人が中心となって、行政活動から得られるデータを分析し、課題を見つけ、解決を図るオープンなデータサイクルを有機的に行うことが重要になるということです。このような新しいデータ利活用の領域を担う分野横断的な知識とスキルを有する人材の養成について共通した課題があり、高等教育への期待が高まります。

（株式会社ポリゴンハウス　辻将悟）

社会を変えるデータジャーナリストになろう

世界中の報道機関が注目している新たな報道手法「データジャーナリズム」について、講義とワークショップをおこないました。講義では非常に多くの質問をいただき、また、ワークショップにも熱心に取り組んでもらえ、受講者の興味の高さを肌で感じることができました。

データジャーナリズムは「インターネット上に公開されているデータから、ニュースを発見し、わかりやすく伝える手段」として、欧米メディアを中心に多くの報道機関が実践しています。最近ではこの分野に特化した「データジャーナリスト」も現れ、新興メディアやNPO・NGOが取り組むほど社会に浸透してきました。しかし日本には実践事例がほとんどありません。大きな要因の一つが「言語の壁」で、データジャーナリズムを知るための日本語の情報が少ない、実践するために必要な日本語で使えるツールが少ない、学ぶための日本語の学習カリキュラムがない、など、日本語環境は非常に厳しい状況にあります。

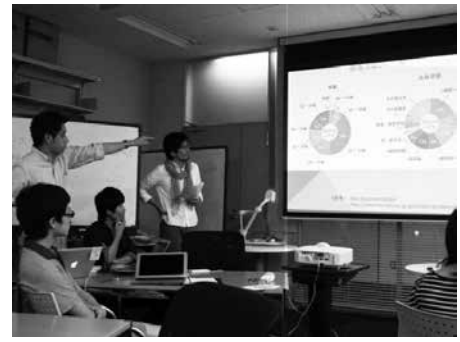
データが示す厳然たるファクトは、人を動かし、社会を変え得る、大きな可能性を秘めています。もし「社会の問題を解決し、少しでも社会を良くしていきたい」との情熱があるならば、言語の壁はさほど高いものではないはずです。今回の講義とワークショップがデータジャーナリズムの魅力を感じる一助となり、まずは一人でも、この魅力あふれる新たな報道手法の実践者として名乗りをあげてくれることを期待しています。

（日本ジャーナリスト教育センター運営委員　赤倉優蔵）

それは本当に「問題」ですか？

大事なことは「自分の立場を理解し」「何が問題かを的確に定義する」こと――今日、Web上では、ある人の発言や、あるニュースの断片が「問題」として一人歩きしているケースを多く目にします。では、あなたが論文を書く人、誰かに提案する人、あるいはその当事者となったとき、それをどう伝えていけば道が開けるでしょうか？　そのときに、上記の「大事なこと」をおさえるべく、きちんと調査することが必要なのだと実感しました。

以上が、今回のワークショップで感じたことです。私は社会人になってまもない身ですが、今回は学生と一緒にそれぞれの立場から議論し、とても勉強になりました。今後もここのイベントに参加し、情報活用のスキルを学生とともに磨いていきたいです。（菊地高史）



学びの連携

2年目の「学びの連携」

「学びの連携」は、慶應義塾の各キャンパスで開発・展開されている先進的な教育メソッドについての理解を深め、日吉の教養教育に新しい可能性を開くこと、またそれを通じて学部やキャンパスの垣根を超えたネットワークを構築することを目指すプロジェクトです。2年目となる今年は、昨年度の成果を深化・発展させると同時に、人的・地域的連携のさらなる拡大を図ることが目標です。第1回の公開セミナーでは、ケースメソッドを用いて、災害に見舞われた組織のリーダーの意思決定のあり方について学ぶとともに、効果測定に詳しい三田キャンパスの先生・独自の地域連携活動をしている日吉の先生をコメンテーターに招き様々な学問的・教育的立場との対話を行いました。（種村和史）

危機時の判断力をケースメソッドで育てる

SFCの若手研究者でヘルスサービス研究会を立ち上げてはや9年。保健、医療、福祉分野の組織や地域のマネジメントの実践力を養えるようなケース教材を作って運用してきました。ここ2年程は、介護福祉施設の震災時の危機管理能力を養うためのケース教材を作っています。

先の大地震の被災地では、介護福祉従事者の瞬時の意思決定が、高齢者等の生死を左右することになりました。刻一刻と変化する現場で、施設管理者や職員達は、専門職の倫理や価値観との葛藤やジレンマ、優先順位をつける難しさを経験しました。

今回のセミナーでは、参加者の皆さんにそんな現場の疑似体験をしていただきました。使った教材は、実際に被災した介護施設でインタビューを重ねてケースに書き起こしたものです。塾内外の教職員や介護現場の方など、皆さん活発に議論に参加して下さり、すばらしい「学びの共同体」ができました。

私達は、ケースメソッド教育の効果検証にも関心を持っています。受講生の主体性を引き出し、特に実務家の実践力の養成に優れていると言われるケースメソッドですが、その効果はこれまで測定されたことがありません。知識伝授型ではない教育の効果は、どうやったら測れるのか、今後も皆さんと議論を重ねたいと思っています。（秋山美紀）

日吉学

「日吉学」始動！ キャンパスの探検と発見、伝承つくりへ。

教養研究センター開所時の2002年に託された役割は、研究・教育の交流を通した新たなキャンパスの構築ですが、なかなか人的交流が研究・教育の活性化に結びついていないのが現状かもしれません。また学生のキャンパス滞在時間が短いこともアンケート調査で明らかになりました。人と人を結びつけ、学びと研究を深めるキャンパスとすべく、日吉地域をフィールドとして3回の実験授業が始動しました。福澤諭吉曰く、学問は読書のみならず「ヲブセルウェーション」が精神の活性化に必要なり。日吉を歩き、観察し、討議と講義を組み合わせた3時間。一貫校生も含む参加者はあらたな日吉の語り部として日吉の未来を紡ぎます。

開催日時：11月2日：日吉の地下壕（考古学の安藤先生）
11月9日：日吉の地形（地図の太田・今尾両先生）
11月16日：日吉の森（生物学の長沖・福山両先生）
（不破有理）

探検！　発見！　「日吉台地下壕」

塾生なら、日吉キャンパスに帝国海軍の巨大地下壕があることを、一度は耳にしているでしょう。日吉が海軍の秘密基地になったのは、アジア太平洋戦争の末期。絶望的な戦局のなかで、連合艦隊司令部を筆頭に重要な部局がいくつもやってきて、特攻中心になっていた戦争の指揮命令をはじめとするさまざまな軍事活動を、この地で行っていたのです。

学生たちにとって、僅か70年ほど前に世界を巻き込む大きな戦争があったという事実を肌で感じ、戦争について考える機会をもつことはたいへん有意義です。そこで今回は、実際に連合艦隊司令部地下壕に入り、その大きさや構造、立地などを体感したうえで、なぜ日吉にこんなものがあるのかを全員で考えてみることにしました。（安藤広道）

探検！　発見！　「地図から見た日吉」

日吉の過去の歴史を紡ぎます。その糸口は「地図」。古地図は過去を知る貴重な証人、その作られた時代の姿を正確に記録しています。近世の日吉の「村絵図」、明治初期の「迅速測図」、明治・大正・昭和の「旧版地形図」から日吉の歴史がわかります。東横電車がなぜここに駅を?!　丘とスリバチに似た谷戸が折りなす日吉の地形はローマの地形と酷似?!　「日吉」は滋賀県「日吉（ひえ）大社」と関係ある?　いろいろと地図から疑問も出てきました。日吉を知れば関東平野の地形発達史や現代に通じる武蔵國（むさしのくに）の人々の営んだ歴史も学ぶことができます。「まち歩き」では地図エッセイストで有名な今尾恵介氏もゲスト参加。日吉の地図から分かる地形と日吉の秘密に出会う一日でした。（太田　弘）

イメージを

【2013 年度学生論文コンテスト】

「よい論文はおにぎりのようだ」

今年度の論文コンテストは「『イメージ』を考える」というテーマです。このテーマ発表を受けて、今年も『ぎりぎり合格への論文マニュアル』というユニークな著書がある山内志朗先生を講師としてお招きして「初心者のための論文執筆入門」という演題で 2013 年 6 月 28 日 18 時 15 分から来往舎 1 階シンポジウムスペースで講演をしていただきました。全体としては論文を執筆する具体的なスキルではなく、論文とはどういうことなのか、論文を書くときの心構えとはどういうものかということを中心に、いろいろな体験談を交えながら、時にユーモラスに、時にシニカルにお話しをしてくれました。講演の中心は、論文と感想文・小論文がどう異なるのか、などでしたが、最も重要なのは「書きすぎない」こと、つまりテーマを小さく絞って書くと言うことを何度も繰り返され、「論文を大盛りや丼にしてはいけない。よい論文はおにぎりのようだ」という名言を残して講演会は終わりました。論文・レポートを作成した経験がまだない、あるいは少ない日吉の学生にとっては参考になったものと思われます。回収したアンケートからも「論文を書く勇気が出てきた」など山内先生の言葉が学生を鼓舞して下さった様子がうかがわれました。（大出　敦）

マンネリ化した自分の発想を乗り越える!

論文執筆において、テーマ設定は最も重要なプロセスの一つです。第 2 回「論文書き方セミナー」は、「新しいアイディアの発想法　メタ思考法と構造シフト発想法を中心に」というタイトルで、『思考脳力のつくり方』の著者としてもおなじみのシステムマネージメント・デザイン研究所教授、前野隆司先生をお招きして、10 月 10 日、18 時 15 分より、来往舎シンポジウムスペースにて講演をしていただきました。私たちの発想は、ついつい常識にとらわれ、型にはまってしまいがちですが、先生には、まず始めに、自分の枠を超えるためには、「考えている自分を俯瞰する」メタレベルでの思考が重要であることを解説していただきました。後半は実践編です。参加者各自が問題設定し、親和図による構造シフト発想法、二軸図による構造シフト発想法など新しい発想法を用いて、「アイディアをシフトさせる（ずらす）」作業を実際に行ってみました。参加者の多くは、既存の思考法では想像もしなかった新しい発想が生まれてくることを実感することがきたのではないかと思います。先生の軽妙な語り口と非常にリズム感のあるワークショップ型の講演は、参加者も積極的に課題に取り組み、盛況のうちに終了しました。（篠原俊吾）

具体的をベースにした
講座

今回のレポート書き方
ター活動の出張版という
普段の 1 対 1 の学習相
を前にして話すという慣れ
もに 30 名以上の学生に
えることができました。

本講座はレポート執
に向けて、テーマ設定
説することが目的となっ
動中に実際に寄せられ
考に、架空のレポート
ロセスを実演していく形
た。レポートを書いた経
筆のイメージを掴んでも
をベースにして話を進め

今後は、演習形式で
ような仕組みを作ることも
き続き、試行錯誤しなが
ばと考えています。

エディティング・スキルズ教室

エディティング・スキルズ恒例、豆本作家田中栞先生による製本教室が 6 月 29 日および 7 月 6 日の 2 回にわたって開催されました。

1 回目は、なんと一日で糸綴の布張ハードカバー本を手作りしてしまう、というまさしく田中メソッドと呼ぶにふさわしい教室。自分の好きな布に合わせて、花ぎれ・トンボ玉付の栞を選び、針と糸を手に取り、ページを綴じていきます。ほぼ家庭にある道具だけで手のひらサイズの本格的ノートブックが出来上がるのには毎回学生もびっくりです。

2 回目は、折り本、糊付頁本、中折本とより簡単な構造の製本を複数体験することで、本の色々な形を学びました。

本年度は、ワークショップ形式で参加希望者を全学から募りました。10 名の申し込みがあり、エディティング・スキルズの先輩たちも加わって、にぎやかな教室となりました。

（吉田恭子）

力タチにする

【学習相談アワー】

た、学生目線のレポート

講座は、通常のピア・メン
位置づけで開催されました。
談とは異なり、多数の学生
れない形式でしたが、両日と
ご参加いただき、無事に終

筆に不慣れな1・2年生
や調査・分析のコツを解
っており、ピア・メンター活
れた質問や相談内容を参
を1本仕上げるまでのプ
形で講義を進めていきまし
経験の少ない新入生に執
らうために、具体的な事例
っていくことを心がけました。
双方向的に参加してもらえる
必要だと感じられました。引
ら継続的に実施していけれ
（文学部4年　松本友也）

学習相談員の展示企画について

学習相談員は年に2回、日吉メディアセンターで企画展示を行っています。2013年度の春学期は、レポートの書き方についての展示でした。対象は初めてレポートを書く新入生と、今まで自己流でレポートを書いてきた2年生です。スケジューリングや資料の調べ方などの項目別にし、どこでつまづいているのか気付けるような展示を目指しました。実際にどのような行程をたどって調査をし、テーマを決め、レポートを仕上げていくかが目に見える形になっています。配布資料として、レポートのフォーマット例も用意しました。配布資料は、例年新入生に好評のようです。レポート課題が出される時期に展示をするので、学習相談デスクに来る相談者の中には、展示がきっかけで来てくださる方もいます。相談デスクでの経験を活かして、秋学期以降の展示は更に充実したものにしていきたいと思います。

（文学部3年　梶山　慧）

2013年度春「学習相談アワー」活動報告

取り組みを始めて6年、正式活動では4年目を迎えた「学習相談アワー」。2013年度春学期（5月7日～7月19日）の活動では、開始当初から変わらない図書館での相談活動を中心に、更なる活動の輪を広げる取り組みを試みました。（以下は全て日吉図書館内での活動です。）①レポートの書き方講座（5月27日・31日）：昨年度の春に実施して好評であった、ピア・メンターによる講座を今年度も実施しました。今回は図書館スタッフによる資料の探し方も同時に開催し、レポート作成の流れをイメージしやすい構成としました。②企画展示「はじめよう、レポ活!」（6月12日～8月21日）：毎春恒例のレポート展示を、スケジューリング・テーマ設定・資料探しの3点に着目し、ポイントを解説しました。③出張相談デスク：レポートの相談が増加する7月に、通常は図書館1階レファレンスデスクにある窓口を1階ラウンジにも設け、相談しやすい環境での活動を試みました。　（杉真梨子）

基盤研究「カリキュラム研究」
6/27（木）開催「学事日程と日吉キャンパス」を終えて

2011年春、東京大学総長によって秋入学への移行が提案されました。これを契機に、多くの大学で国際化への取り組みについて盛んに議論がされるようになりました。秋入学への全面移行の議論は、今年度に入って大きく後退することになりましたが、国際環境の変化に大学がいかに対応するか、教員たちが意識するようになったことも事実です。

教養研究センター基盤研究では、昨年度からこの問題をとりあげて調査・研究を行い、学期制に関する具体的な提案も行ってきました。学期制に関する学内論議が一定の収束を見ようとしていた時点で、本シンポジウムは開かれました。

金田一真澄・理工学部教授・日吉主任がまずこれまでの経緯に関して報告し、種村和史・商学部教授・教養研究センター副所長が、学期改革に関して留意すべき点として、等身大の学生の姿をしっかりと受け止める必要性について語りました。佐藤望・商学部教授・教養研究センター基盤研究座長は、開かれた大学へ向けて何ができるかについて発表しました。

発表の後、清家篤塾長が論議に加わり、慶應義塾が何のための大学か、といった重要で根本的な問題について、意見を交わしました。当日は60名を超える教職員の参加があり、2時間を超える白熱した議論がおこなわれました。この様子は、シンポジウム報告書として、教養研究センター・ホームページで電子出版されますので、どうぞご覧ください。　（佐藤　望）

未来先導基金プログラム

第４回庄内セミナー

８月30日から９月２日にかけて未来先導基金公募プログラム「第四回庄内セミナー」が山形県鶴岡市慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）を基地として開催されました。今回のテーマは「庄内に学ぶ生命−あらためて生と死を考える」。

内容は「生命」に関するマインドマップ作成、徂徠学・即身仏と羽黒修験・庄内藩士の生き方・庄内の信仰風土に関する講義、講師との対話と議論、即身仏拝観（注連寺）、松が岡開墾場見学、庄内論語の素読体験（藩校・致道館）、山伏体験、致道博物館や藤沢周平記念館の見学、羽黒修験・八朔祭の見学（羽黒山）、慶應義塾大学先端生命科学研究所ラボ見学でした。講師の皆さんをはじめ、セミナーにご協力いただいた鶴岡市の皆さんに心より感謝いたします。　（羽田　功）

生命を感じ考える４日間

我々は当たり前のように毎日を生きているが、それはいくつもの要素がバランスよく成り立っているからなのだと思いました。普段何気なく享受しているもの、空気・熱を遮断する山伏修行にて、そのことを実感しました。また、鶴岡キャンパスにもお邪魔させて頂きました。生命の最先端技術を目の当たりにし、素直に感心しました。しかし同時に、人間が生物のそのバランスを恣意的に崩すことの倫理的問題についても考えさせられました。生命について、なにかしらの結論を出すことは簡単には出来ません。しかし自分と異なるバックグラウンドをもった方々と共に、過去と未来が交わる庄内の地で、真剣な議論が出来たことはとても良い機会でありました。　（経済学部４年　宮杉隼人）

実施期間：８月30日（金）～９月２日（月）［３泊４日］
場　　所：慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス他
参加人数：学部学生 25 名、院生２名、社会人７名、スタッフ９名　合計 43 名
講　　師：小室正紀（経済学部教授）、山内志朗（文学部教授）、酒井忠久氏（致道博物館館長）、春山進（庄内民俗学会幹事）、富樫恒文（庄内藩校致道館）
参 加 費：学部学生、大学院生：1,000 円、社会人：10,000 円
※ 現地までの往復交通費は自己負担（現地集合・現地解散）
宿泊場所：休暇村羽黒（鶴岡市）

【関連企画】
・日吉メディアセンターとの協力で庄内関連図書とパネル展示（6/7 ～ 7/12）
・学生健保主催の朝食サービスで生協の協力により庄内米の提供（6/10 ～ 14）
・庄内フェア（11/4 ～ 16）

スケジュール

１日目	・現地集合（鶴岡市 TTCK） ・「生命」に関するマインドマップ１作成 ・「徂徠学」講師：小室正紀（経済学部教授）
２日目	・即身仏拝観（注連寺） ・松ヶ岡開墾場見学 ・「庄内論語」講師：富樫恒文（庄内藩校致道館） ・鶴岡市内見物 ・「即身仏と羽黒修験」講師：山内志朗（文学部教授） ・羽黒修験「秋の峰入り」八朔祭見学
３日目	・ミニ修験体験 ・「庄内文化論」講師：酒井忠久（致道博物館館長）、春山進（庄内民俗学会幹事）
４日目	・慶應義塾大学先端生命科学研究所見学 ・マインドマップ２作成 ・懇親会　終了後現地解散

（日水邦昭）

カドベヤ ── 「創造的」に町のありかたを考える

2010 年の４月に横浜市中区に開所した「カドベヤ」は、地元の方々と共に町のありかたを考える拠点です。未来先導基金の対象事業となっている１, ２年生用の授業「人文科学特論」（法学部設置）では、このカドベヤを足掛かりとして、寿地区の就労支援の現場や港北区役所、南区役所、および地域活動ホームを訪れ、その眼で見て、話を聞くことを積み重ねてきました。同じく３, ４年生の授業「人文科学研究会」（法学部設置）では、イギリスの文化政策、およびまちづくりを研究対象として「創造都市論」を批判的に考え、横浜の未来を考察してきました。また研究会では立教大学と横浜国立大学の研究会と合同ゼミを開催することによって、社会学、地理学の視点を学びました。

これから学生たちは、学んだ理論をまちづくりの現場に批判的に活かしながら実践に応用していきます。また、交流活動「カドベヤで過ごす火曜日」にも参加することで、まちづくりの当事者としての意識を培っている最中です。１年間の研究と実践の成果は日吉キャンパスやカドベヤで発表していく予定です。（横山千晶）

「カドベヤで過ごす火曜日」の一幕：一緒にご飯を食べる

研究サポート「研究の現場から」

〈第７回〉合綴本とイングランドの初期印刷文化

作品が書物として存在する際、そのカタチは時代や媒体によってさまざまです。また作品の読みは、それを書物として成り立たせている形態や取り巻く文脈に左右されます。例えば、中世後期においては、チョーサーやリドゲイトといった作者の古典化が進み、「アンソロジー写本」が生まれました。これは初期印刷文化において「合綴本」（Sammelband, tract volume）という形で受け継がれました。本発表では、近年の書物史研究で注目の集まっている「合綴本」という現象に注目し、なぜこのような書物のかたちが生まれたのか、その文化史的背景や作品受容の具体例について、実例をお見せしながらお話ししました。

（徳永聡子）

〈第８回〉フグとスイカ：俳句とブルースの「革命的」な出会い

翻訳大国の日本においては、アフリカ系アメリカ人による文学作品は早くも20世紀初頭から紹介されてきましたが、現代の読者はこの伝統に対してどのようなイメージを持っているでしょうか?ブルースやジャズなどの技法を転用し、奴隷制のトラウマや人種差別の暴力を描いた作品を思い浮かべる方が多いでしょうが、じつはアフリカ系アメリカ文学には100年にもおよぶ俳句の伝統があります。今回は、1960年代から70年代にかけて、つまり、公民権運動、そしてより急進的に革命を通して人種差別撤廃を目指したブラック・パワーの時代に、黒人詩人たちが俳句をいかに理解し、実践していたのかについてご紹介しました。　（有光道生）

第９回「研究の現場から」——研究と人の交差点——

日吉キャンパスは多様な分野の専門家の宝庫にもかかわらず、なかなか研究の話をする機会がないとお悩みの方々、講義でお疲れのあと、美味しい飲み物と軽食でほっとしながらも刺激的なお話を聞きたいという方、この機会にお知り合いも増え、共同研究のきっかけにもなり、といいことずくめ。専門や学部の枠を超えた研究・交流を目指すセンターならではの円卓サロンです。9回目となる12月の会には、今年度新任の小原さん（スペイン語）と芦野さん（フランス語）を講師にお迎えします。どうぞお楽しみに。予約は不要、ふらりとお立ち寄りください。　（不破有理）

12月11日（水）18：15～　来往舎101にて
小原　正（経済学部）
「砂金と砂糖——メキシコ南部におけるスペイン人征服者の経済活動」
芦野文武　（文学部）
「多義語と意味的同一性——フランス語と日本語の例から」

〈第７回〉ガリレオとレオナルド—月面観測と『絵画論』

私の専門はイタリアの美術や建築の歴史ですが、17世紀科学革命の代表の1人ガリレオ・ガリレイと美術の関わりについても関心を抱いてきました。ガリレオの天文学分野の成果、たとえば有名な月面観測については、美術史家や科学史家たちから、ガリレオの視覚的認知の枠組みを育んだトスカーナの先進的な美術がなんらかの貢献をしたのではないかとの指摘がされてきました。今回私は、先行研究の概要を紹介しつつ、私自身の目下の知見として、ガリレオの月面観測が、陰影の観察を核とする作業仮説に基づいており、その作業仮説が、陰影に関する絵画の理論、とりわけレオナルド・ダ・ヴィンチの理論の強い影響下にある可能性について紹介しました。　（金山弘昌）

〈第８回〉ヴァイマル共和国時代の本づくり—ある文芸ジャーナリストの場合

私の発表では、ヴァイマル共和国期（1918－1933）のドイツ語圏で活躍したクルト・トゥホルスキーの自選著作集を、文化史的側面から紹介しました。1920年代のドイツでは、新聞文芸欄を舞台に活躍した職業作家たちが、著作集や作品集を相次いで出版していました。その一例として、この作家が新聞や雑誌に発表した「記事」が「作品」として書物に収まる際に生じた編集や装丁、出版史などの特徴を追っていくと、現代にも通じる読書や書物についての諸問題が読み取れます。中でも、彼がフォト・モンタージュ作家と組んで出版した写真集を巡っては、当時の写真集ブームにみられる写真とテクストの関係についても、あわせてお話しました。　（山口祐子）

注目！　研究会助成制度

この助成制度は教養研究センターの所員が企画する研究会やワークショップを支援することによって、さまざまな研究・教育の企画が日吉で開催される機会を増やすこと、また所員に公開していただき日吉における研究の情報交換の場を広げることを目的とします。助成は開催に伴う経費（謝金、印刷費など1件上限10万円）と日吉キャンパス内の広報の支援を負担します。年2回1月と7月の月末に締め切ります。春学期の企画は1月、秋学期分は7月にご応募下さい。次回の締切は1月31日。詳細は教養研究センター事務室へどうぞ。

求ム・来往最前線情報！

所員の方々の研究・教育のご紹介をします。勉強会、研究会、講演会、ワークショップのお知らせ（日時・内容・研究会名・担当教員・連絡先）、著作刊行物がありましたら、情報をお寄せ下さい。
教養研究センターへ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

11月

【日吉キャンパス公開講座】
人の形 ー身体の表現と認識、身体の今とこれからー

10月5日（土）～12月7日（土）全9回18コマ
3時限（13:00～14:30）、4時限（14:45～16:15）
第4校舎 J24番教室

本年度の日吉キャンパス公開講座は「人の形—身体の表現と認識、身体の今とこれから」と題し、10月5日から12月7日までの日程で開催しております（各回とも土曜13:00より、全18コマ）。「人はなぜ人の形をしているのか?」という素朴な疑問に対し、慶應義塾内外の講師がその専門分野から研究の一端をお話しいたします。身体という対象ゆえ、人形（劇）、舞台、美学、文学といった芸術・文系の分野から、社会学的視点、さらにはスポーツ、宇宙、ロボット、iPS細胞といった理系・医学系の分野まで、さまざまな学問領域を横断していくのが今回の講座の特徴です。そのなかで身体の表現や認識の変遷、身体の未来像について学ぶことを目的とします。（新島　進）

秋学期第3回【情報の教養学】
ロボットは社会進出できるのか?

11月27日（水）16:30～18:00　第4校舎独立館 D201

学生論文コンテスト

応募締切　11月28日（木）・29日（金）
結果発表　1月中旬予定

【学会・ワークショップ等開催支援】
日本ジョージ・エリオット協会　第17回全国大会

12月7日（土）10:00～18:00　来往舎2階大会議室

【学会・ワークショップ等開催支援】
第17回日本レーザー・スポーツ医科学学会

12月7日（土）　体育研究所（スポーツ棟）

第9回【研究の現場から】

12月11日（水）18:15～　来往舎101 / 102　→特集V
小原　正（経済学部）
「砂金と砂糖——メキシコ南部におけるスペイン人征服者の経済活動」
芦野文武（文学部）
「多義語と意味的同一性——フランス語と日本語の例から」

秋学期第4回【情報の教養学】
ロボットは東大に入れるか

12月18日（水）16:30～18:00　第4校舎独立館 D201

【Shakespeare Drama Workshop】
Julius Caesar in Action

12月22日(日)・23日(月)13:30～17:45　来往舎シンポジウムスペース
Neil Mclynn先生、来日指導!

【極東証券寄附講座アカデミック・スキルズ】
プレゼンテーション・コンペティション

2014年2月7日(金)

【教養研究センター選書出版】

2014年3月予定

12月

【学会・ワークショップ等開催支援】
国際アーサー王学会日本支部大会

12月14日（土）12:30～17:30　来往舎シンポジウムスペース
講演会：高宮利行
「Peter Field の新版（2013）に至るマロリーの諸版について」
シンポジウム：「トールキンと詩の伝統」
辺見葉子「ケルトの唄人（うたびと）トールキン」
伊藤盡「『アーサー王の詩』と頭韻詩の伝統」
高橋勇「現代詩人トールキン」

【日吉キャンパス特別講座】出版文化史の東西

12月21日(土)、2014年1月11日(土)、18日(土)
3時限（13:00～14:30）、4時限（14:45～16:15）
日吉キャンパス内

【慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・オペラプロジェクト】
『コジ・ファン・トゥッテ』

12月21日（土）、22日（日）、2014年1月4日（土）、5日（日）
開場 16:00 / 開演 17:00　協生館内藤原洋記念ホール

【学会・ワークショップ等開催支援制度】春学期開催分募集

申請締切　2014年1月31日（金）
結果発表　2014年2月28日（金）

2014 1月 2月 3月

＊各イベントへのお問い合わせは、toiawase-lib@adst.keio.ac.jpまで

私の一人旅（マルマル）自慢

4月より教養研究センターに参りました、提橋（さげはし）と申します。名字が珍しく、よく“堤”と漢字を間違われますが、手提げカバンの“提”ですので、これを機に名前を覚えて頂ければ幸いです。さて、何を話そうか悩みましたが、今回は私の一人旅話を……。国内を一人旅する事は多いですが、昨年は初の海外一人旅に挑戦しました。カナダのバンクーバーを出発し、ケベックシティ→モントリオール→トロント、そして最後にニューヨークの20日間北米の旅。私流一人旅の醍醐味は、「交通機関を使わず、地図も持たず、ひたすら歩いて街中を観光する」事で、今回も各街を沢山歩き回りましたが、一番歩いたのがニューヨークでした。ウォール街からスタートし、マンハッタン、セントラルパーク、そしてまた徒歩でウォール街へ戻り、橋を渡ってブルックリンへ。流石にこの日は歩きすぎて筋肉痛になりましたが、迷わず長距離歩ける事が私の特技であり自慢でもあります。今はなかなか長期で旅をするのは難しいですが、またいつか世界各国を歩き回るのが密かな夢です。（提橋季実子）

ReCLA Newsletter
November, 2013. No.23

慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for Liberal Arts）
発行日：2013年11月30日　代表：不破有理
〒223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1　TEL：045-566-1151　Email：lib-arts@adst.keio.ac.jp
http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/